

P-25 子宮体中胚葉性混合腫瘍は特徴的MR像を示す—dynamic MRIとconventional MRIとの併用による鑑別診断について

姫路赤十字病院, 岡山大放射線科*

赤松信雄, 水谷靖司, 川田昭徳, 小高晃嗣, 新居田一尚, 小田佳恵, 片山さなえ, 上者郁夫*

〔目的〕各種MRI撮像法, なかでも造影剤静注直後の造影効果を描写するdynamic像, 造影剤静注5~10分後に撮像する造影T1強調像と従来からのスピネコ—法によるT1強調像, T2強調像とによる子宮体の中胚葉性混合腫瘍と平滑筋腫, 平滑筋肉腫, 癌肉腫との鑑別能を明らかにする.

〔方法〕子宮体に発生した中胚葉性混合腫瘍3例と平滑筋肉腫4例, 癌肉腫1例, 平滑筋腫31例36筋腫核に対して0.5ないしは1.5Tの超電導型装置によりMR画像を撮像した.

〔成績〕T1強調像では全ての組織型で等信号域を示すものが, 中胚葉性混合腫瘍, 平滑筋肉腫, 癌肉腫の全てと平滑筋腫32(89%)と多かった. T2強調像では中胚葉性混合腫瘍3(100%), 平滑筋肉腫3(75%), 癌肉腫1(100%)と平滑筋腫11(31%)で高信号域が観察された. 一方, 造影剤を注入する撮像法では中胚葉性混合腫瘍3(100%)と平滑筋腫30(83%)でdynamic像及び造影T1強調像での造影効果は僅かで, 全ての撮像時期を通じて筋層より低信号であった. 一方, 平滑筋肉腫4(100%)と平滑筋腫6(17%, cellular;1, submucous;5)ではdynamic早期から末期まで強く造影され, 造影T1強調像でも高信号であった. また, 癌肉腫1(100%)はdynamic像で中期以降強く造影され, 造影T1強調像でも筋層よりも高信号であった. 3平滑筋腫(8%)では早期のdynamic像のみが筋層よりも高信号であった.

〔結論〕中胚葉性混合腫瘍では多くの平滑筋腫と同様にdynamic像と造影T1強調像での造影効果は乏しかった. 一方, T2強調像では平滑筋肉腫, 癌肉腫とともに高信号域を形成した. 両者の所見を合わせてMR画像を読影することで, 中胚葉性混合腫瘍のMR鑑別診断の可能性が示された.

P-26 子宮体癌 IIIa期腹腔細胞診陽性例の癌進展様式および予後に関する検討

国立病院四国がんセンター

野河孝充, 日浦昌道, 藤岡 徹, 村上順子, 横山 隆, 千葉 丈

〔目的〕腹腔細胞診陽性例の子宮体癌進展様式と術後化学療法に対する予後を検討した.

〔方法〕1986~92年に当院で手術を受けた新FIGO III期の腹腔細胞診陽性(Class IV or V) 10例を対象に, 腹腔細胞診陽性率, 組織型, 癌の浸潤態度, リンパ節転移, 腫瘍マーカー, 更に予後との関連について解析した.

〔成績〕子宮外浸潤(附属器転移や漿膜浸潤)を有するIII期の腹腔細胞診陽性例は10/21(48%)と低率で, またリンパ節転移群(2例は附属器転移合併) IIIc期でも 0/8(0%)と, リンパ節転移との関連はなかった. IIIa期の腹腔細胞診陽性群の子宮外浸潤無しは6/10(60%)と半数以上を占めた. この6例はG1, G2 各 2例, 腺扁癌1例, MMT 1例で, 組織型との相関は無かった. これらの筋層浸潤の深さは MMTの17%, 残りの 5例は50~90%を, 脈管侵襲は全例中等度に, 頸部浸潤は3/6(50%)であった. さらに子宮腔充満型の腫瘤形成が4/6(67%)で, 子宮外浸潤陰性の腹腔細胞診陽性例は癌の子宮に占める体積や面積の割合が高かった. 腫瘍マーカー陽性率は子宮外進展の無い6例と有りの4例の順に, CEAは 1/6(17%), 0/3(0), CA125は 4/6(67%), 2/4(50), CA19-9は3/6(50%), 3/4(75)となり, CA 125, CA19-9は両群で陽性率が高いものの子宮外浸潤との明らかな相関はなかった. このIIIa期 10例には, 全てに術後多剤併用化学療法が施行され, 子宮漿膜浸潤の 1例のみに局所再発が認められたが, 全例生存中である.

〔結論〕子宮外浸潤の無い腹腔細胞診陽性例は癌の占める面積と体積に関連し, 術後化学療法で十分制御可能で, 比較的予後良好な因子と考えられた.